

皆さま

今年度私の本務校で行いましたワンアジア財団助成講座の関連企画として下記のシンポジウムを今月26日(土)に行います。奮って、ご参加ください。

なお、午後の「コメントおよびディスカッション」には日本語-英語通訳が付く予定です。

午前のクロアチア側の報告(英語)については、事前に原稿を邦訳しておきますので、ご希望の方は越村までお問い合わせください。

越村 勲

koshi@zokei.ac.jp

シンポジウム「16・7世紀の海上貿易と海商、海賊～東地中海と東アジア海域の比較の試み」の趣旨と内容

まず私が関心を持ったのはクロアチアのウスコクです。このウスコクはフランスの歴史家ブローデルの『地中海』にも登場する海賊です。日本ではほとんど知られていませんが、本国クロアチアでは数多くのうたに詠まれた英雄です。

そもそも海賊というと、多くの方はカリブや大西洋の海賊を思い浮かべるでしょう。こうした海賊の多くは、一六五〇年頃から一七二〇年代までの「海賊の黄金時代」に名を馳せ、主に新大陸で得た富を持ち帰るスペイン船を標的にしたアウトローでした。一方ウスコクは、「海賊の黄金時代」の一〇〇年以上前に生まれ、「海賊の黄金時代」の前に消えていきました。

このウスコクは大航海時代の幕開け以後の早い時期、主に貧しい人々が16・7世紀の経済、政治や軍事の変化に反抗した一例といえるかもしれません。その意味では東アジア地域の倭寇その他の海賊とも共通します。そこで私はウスコクと倭寇、つまり東地中海と東アジア海域の海賊の比較を試みることにしました。

その際問題となるのは、直接の接点がないであろう二つの海域の海賊をどのような枠組みで比較するかということです。そこで第一に参考にしたのが、ウォーラステインの義賊論です。以下は南塚信吾先生の『アウトローの世界史』に紹介されたウォーラステインの義賊論です。

・・・ウォーラステインは、「長い一六世紀」に「ヨーロッパ世界経済」が誕生すると見ているわけだが、かれはそれともなって生ずる経済の再編過程で生じた混乱の一徴候として、「盗賊 banditry」を位置付けている。

彼によると、盗賊は一六世紀に、ヨーロッパ世界経済の「中核」において国家の力が強化されていく過程で生まれたものであった。つまり、絶対主義国家が形成されていくなかで、国家(君主)は一部の貴族から伝統的諸権利(そうして富

の源泉)を奪い、農民の一部から生産物を奪って、その官僚機構を維持するとともに、国家の中に富の集中をつくり出し、その一部を奪う誘惑を生み出してしまふ。そこにさらに、国家の権威が十分に広がらず、国家が経済的・社会的変動によって生み出された再編成を保障できず、インフレや人口増加や食糧不足にさいして平等な分配を保障できないようなときに、義賊が現れる。その意味では義賊は、近代国家自らがつくり出したものである。

### 義賊と国家

そして、ウォーラステインは、とくに地中海地域を念頭におきながら、この一六世紀における「義賊」の特徴として、第一に、その中心的メンバーが極貧農ではなく、むしろ萌芽的なヨーマン(かれはこれを農業企業家と見る)であることをあげる。かれらが、この地域での「封建反動」と「半辺境化」に抗議して、大地主にたいする「義賊」行為を採用したというのである。第二の特徴として、没落貴族が含まれていたことを指摘する。しかし、この没落貴族層は、国王の廷臣になれないから義賊を選んだのであり、その意味で、かれらが強い国家を望んだことの現れであったという。つまり、貴族は「伝統的な」抵抗の形態に逃避したのではないというのである。こうして、「義賊」は企業的農民と強い国家を求める没落貴族という近代的な勢力が担うものということになった。

したがって、ウォーラステインによると、「義賊」を国家の権威にたいする貧民の伝統的・封建的な抵抗と見るのは著しい誤りである。かれはブローデルの義賊論を援用しているが、そのブローデルの義賊論は、かれの議論の方向とは違う。ブローデルは「強盗行為は潜在的な農民一揆であり、窮乏と人口過剰が生んだ息子である」と述べているのだから。。。。。。。

南塚先生によるウォーラステイン義賊論の要約でした。そして私は、今のところ、ウスコクはブローデルのいう「強盗行為は潜在的な農民一揆であり、窮乏と人口過剰が生んだ息子である」と考えています。ただし、次のようにも考えます。ウスコクは、社会的義賊の面もたしかにあります。政治的な境界で強大な政治的権力と戦ったために、その英雄化が大いに進んだ例なのではないか、と。

一方倭寇その他に関しては、全体的評価については専門家にお聞きしたいと思っておりますが、いまのところ事実関係については私は次のように認識しています。

「倭寇も貧しい人々が多く含まれている。その指導者に海商が含まれる。民衆と海商、ともに明をはじめとする一国主義政策に反対し、近代に向けた変化をむしろ支持した。そして事実として(中国の)海禁政策は見直された」。

以上が東地中海と東アジア海域の比較の大雑把な枠組みですが、今回のシンポジウムの直接の目的は海商・海賊という集団に絞ってみて、二つの海域にどう違うかや共通点が見えてくるかを明らかにすることです。

\*\*\*\*\*

スケジュール

- 10:20 開始  
10:40～ N・シュテファネッツ（ザグレブ大学）報告  
11:50～ S・ラザニン（ザグレブ大学）報告  
1:00～ 休憩  
2:00～ 飯田巳貴（専修大学）報告  
3:10～ 松浦章（関西大学）報告  
4:20～ 小休止  
4:30～ 上田信（立教大学）報告  
5:40～ コメントおよびディスカッション  
6:30 終了予定

場所：世界史研究所

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2丁目17番3号渋谷アイリスビル10階

TEL: 03-3400-1216 FAX: 03-3400-1217

参加費：無料

今回のシンポジウムでは、まずシュテファネッツ先生が、アドリア海の海上貿易と海賊について包括的に説明し、その上で同先生の専門である近世クロアチアを代表する大貴族が庇護した海賊について報告していただけたと思います。次にラザニン先生に、現在のクロアチアでウスコクがどのように研究されているかについて報告していただきます。ウスコクについてはイギリスのウェンディ＝ブレイスウェル女史による著作（*The Uskoks of Senj~Piracy, Banditry, and Holy War in the Sixteenth-Century Adriatic*, Cornell University Press, 1992.）が、ウスコクに関する貴重な研究（イタリア語、クロアチア語、ドイツ語の外交文書や裁判記録といった公文書、役人や歴史家など個人の記録を駆使した）であるだけでなく、他に類を見ないほどの優れた精神史研究だと思われます。ラザニン先生にはこのイギリスの研究がクロアチアにどのように影響したかについても説明していただけたはずで

さて飯田先生にはヴェネツィアとオスマン帝国の交易についての研究の動向とそこから見える海商・海賊問題について、松浦先生には中国の海商・海賊問題についてのご自身のこれまでの研究をまとめていただき、最後に上田先生には「中国の」海商・海賊が義賊と呼べるかについて研究報告していただけたと思います。各報告の正確なタイトルも、越村までお問い合わせください。

なお、補足として、南塚先生の前掲書の「義賊イメージ」に関する叙述を添付しておきます。ご参考まで。

以上

補足 (『アウトローの世界史』より)

時代とともにどう変わったのか

これまで、「長い一六世紀」以来の近・現代史において現れた義賊を、時代順に、また地域別に検討してきた。義賊には、伝説上の義賊と、実態としての義賊の両方を含めて考えてきた。「はじめに」で述べたとおり、本書では、アウトローのうち、民衆からは「義」を体現しているかのようなイメージを持たれる賊を、広い意味での義賊とし、たんにイメージを持たれるだけでなく、そのイメージを裏付けるような実態を持った賊を、狭い意味での義賊としてきた。この二つの関係は時代的にいくらか変化しているようである。

どうやら「長い一六世紀」に、豊かな者から奪い、貧しい者に与え、権力者の悪を正すという社会的反抗者としての義賊のイメージがつけられたようである。それは、ロビン・フッドのような、いわゆる「高貴な盗賊」のイメージであり、そのイメージは「世界システム」の「中核」においてできあがったのである。なぜなら、「中核」においては、現実の地方社会は国家的に統合され、行政的に整備されて、義賊の存在する余地が少なかった。だからこそ、まさに「中核」における国家の凝集力の強化への反発として、義賊のイメージがつけられたのではなかろうか。

同時に、この時期の「準周辺」においては、いくらかの実態をともなった義賊が現れていた。地中海世界やバルカンの義賊がそうである。これは、国家の中央集権化の過程が始まりつつあるが、地方社会において国家権力がまだ弱いところにおいて現れた現象であった。

いずれの場合にも、近代国家の凝集力、つまり地方社会の中央集権化が強まることへの反抗として、義賊を位置付けることができよう。そうした義賊はまだ無名の者たちであった。個々の有名な義賊が登場するのは、次の時代である。

.....

義賊の歴史的意義とは

.....

たしかに、義賊が代弁した民衆の価値は多様なものがある。それは時代的にも地理的にも異なっていた。したがって、個々の義賊を時代的・地理的に多様な個々の民衆社会のなかに位置付け直し、その社会の民衆の客観的世界と義賊との関係を分析し、そのうえで義賊を個別的に評価していくことが必要になっていることがわかる。

これは、義賊の歴史的研究には社会史的研究が必要であること、あるいは逆に、

社会史的研究が進んではじめて義賊の歴史的研究が可能であることを意味している。本論でも示唆してきたように、義賊の研究には、在地の経済体制、地方行政制度、治安・警察制度、軍隊制度、司法制度のほか、地方社会におけるパトロン＝クライアント関係、名望家の実態、あるいは民衆の日常的な人的つながり、人的交流・情報の場、とりわけ居酒屋や市場などの役割の研究が必要になる。そういう研究を通じて、民衆の社会的結合関係（ソシアビリティ）の実際が研究されれば、義賊研究は非常に大きな産物を生み出すことになるのである。

つまり、義賊研究は、現在求められている社会史研究に新たな局面を切り開くことを期待されているのである。

ホブズボウムへの批判は、主として義賊の実体的側面の研究に関して出されたものである。しかし、本書でも綴り返してきたが、イメージの重要性もさらに突っ込んで検討しておく必要がある。

義賊イメージが民衆のあいだでどのように形成されてくるのかという研究は、ほとんどない。ロビン・フッド伝説の研究のようなものがほとんどの義賊についてもおこなわれる必要がある。

義賊イメージは、バラッド（民衆歌謡）、口承説話、民衆劇、家具、装飾、小説、映画・テレビなどによってつくられ、伝えられてきた。もちろん、それらによってつくられた義賊イメージの比較研究も必要であるが、義賊イメージがいついかなる人々によって、いかなる目的でつくられたのか、それは在地の人々の生活や思考とどのように重なり合うのか、ということを確認していくことが歴史研究には必要である。それは実証のむずかしい作業であるが、避けることはできない。そうすることによって民衆の「心性」が明らかにされれば、義賊研究の成果があったことになるのである。

それゆえ義賊研究は、現在求められている文化史研究をいっそう推し進めることを期待されているのである。

義賊が民衆から一定のイメージでとらえられていること自体が一つの歴史的事実であるという観点から、義賊に開運する各種の伝説を分析し、義賊とその地方社会に生きる民衆の主観的世界との関係を明らかにする必要があるのである。民衆は、義賊にたいしてある一定のイメージを持ち、それを受け入れるがゆえに彼らを庇護するのであり、またそのイメージに励まされて、自らも行動に立ち上がったたりするからである。この場合、イメージが事実と合致するか否かは民衆にとっては問題ではない。沖縄の運玉義留の役割は、ここにある。

この義賊イメージは、ホブズボウムのあげるようにある程度共通するが、それでもなお具体的には地域ごとに多様であり、個々のイメージに付与される価値も異なる。たとえばホブズボウムは民族的ヒーローというイメージをあげていないが、これは東欧では決定的に重要である。民衆の正義観は地域的に異なる可能性

がある。

このようなことを理解するには、その地方の民衆の価値観の深い分析が必要となろう。ホズボウムは、義賊は次に来る近代的な民衆運動につながる原初的な運動であるとするが、そのつながりは、こういう主観的側面を押さえないでは明らかにされないであろう。